

こちら特報部

ウクライナ侵襲後、日本の言論はどくどく危惧を醸成している。たとえば安倍晋三氏の「核共有」発言、首相在任時は「非核三原則」を堅持する方針と述べたが、先月、核共有を巡り「日本もさまざまな選択肢を視野に入れて議論するべきだ」と言い出した。混乱に乗じた強弁にも見える。

気になるのが、ちまたの空気がだ。毎日新聞の世論調査(今月十九日実施)では、核共有について「議論すべきだ」が57%に。産経新聞・NNNの調査(十九、二十日実施)では核共有に向けて議論すべきだ」が20.3%、「核共有はすべきでないが、議論はすべきだ」が62.8%だった。

唯一の戦争被爆国にもかかわらず、核へのハードルが下がっていないか。

東京女子大の広瀬弘志名誉教授(災害リスク学)は「力には力」に傾きかねない現状について「ロシアの原発攻撃や核による脅しがあり、世論は過剰防衛的になりつつある。恐怖感や不安が蔓延している。政治的戦術に世論が惑わされている気配がある」とみる。



# 戦時どさくさ紛れで推進 非民主的では

「冷静に考えれば核共有は非常に大きなリスクを負う可能性がある。情報の多様性を確保しておかないと、第二次世界大戦のようになどが起りかねない。核で脅したり守りつとしたりするナンセンスに気が付かないといけない。」

異論排除の兆しもうかがえる。ゼレンスキー氏の国会演説を前に、立憲民主党の泉健太代表が「『首脳会談・共同声明』が絶対条件」とツイッターに投稿した際は「すぐに難免あることは解党してほしい」とな

①記者団の取材に応じる立憲民主党の泉代表＝国会で  
②大陸間弾道ミサイル「ピースキーパー」の核弾頭部分＝2005年9月、米ワイオミング州で(共同)

## 核共有議論 背景に「恐怖感染症」

## 山東参院議長物議「命をも顧みず戦う姿に感動」



十分余りにわたるゼレンスキー氏のオンライン演説後、国会議員らを前にあいさつした山東氏。言葉に抑揚を付け、芝居がかったような口調でこう述べた。

「閣下が先頭に立ち、また貴国の人びとが命をも顧みず、祖国のために戦っている姿を拝見して、その勇氣に感動しております。」

ツイッターでは大統領の演説が「少しばかり抑えられてしまった」なかで「山東昭子さんだけが救い」と評価するものもあったが、それは「くわすか」。「日本に戦時の気持ちを持ち込もうとしていた」「危険なことだ」と批判が噴出した。

戦禍にあるウクライナのゼレンスキー大統領が二十三日、国会演説した。よく見る強い口ぶりではなく、感情の起伏を抑えながら人命犠牲のいたまじさを語った。対照的だったのが、その後にあいさつした参院議長の山東昭子氏。「命をも顧みず、祖国のために戦う姿に感動した」と勇ましく述べたのだ。そのままでは戦う状況は本来、悲しむべきではないのか。「お国のため」を煽動しかねない発言には危うさが漂う。

(古川雅和、大杉はるか)

# 「個」の犠牲いとわらず 危うい「愛国」

反戦デモを行った市民団体「武器取引反対ネットワーク」の杉原浩司代表も語気を強め「大統領の演説をちゃんと聞いていたのか。(山東発言は)自分の言いたいことだけ。あきれて言葉も出ない」と述べた。

批判が高まる山東発言。山口大の細川厚名教授(政治学)は「不穏当である」と切り捨てた。「国を守るためには犠牲をいざわねい、そういってゆがんだ愛国心を求めていることにはかならないからだ」。

国会議員の代表として発言をするならば「戦争にならないように、どう外交努力をするかを考え、訴えないか」(細川氏)。自民が

加え、山東氏は「良識の府」とされる参院の議長だ。「立場の重さを考えれば、個人の思想や感情を出すべきではなかった。」

愛国心で思い起すのが、自民党の改進黨案だ。公表されたのは二〇二二年四月。武力攻撃や内乱、大規模災害などが起きた時に「内閣は法律と同一の効果をも有する政令を制定できる」とし、国などの指示に従う義務を国民に課している。つまり、個人よりも国を重視する立場を取る。

山東氏も長く自民に籍を置いたことから「あの発言は草案が影響したのではないか」(細川氏)。自民が

## ゼレンスキー氏と対照的「右派代弁 完全に白けた」

「お国のため」を喧伝したように思えてしまう。ゼレンスキー氏による二十三日の国会演説は、欧米で行った際と異なり、慎重な表現が繰り返された。

米議会で演説では、北大西洋条約機構(NATO)に向け、ウクライナ上空の飛行禁止区域の設定や戦闘機の供与を要求。ロシアと経済的な結びつきが強かったドイツでは「欧州に自由と不自由を隔てる壁ができていく。壁を壊してほしい」と迫った。これに対し、二十三日の演説では強い言葉が避けられ、平和への願い、停戦への協力や求める訴えが重ねられた。

そんな中で「滅私奉公」をおおるような発言をしたのが山東氏だった。

憲法に詳しい沢藤統一郎弁護士は「ゼレンスキー氏が日本の世論に配慮し、抑制的に演説しているにもかかわらず、山東氏から出てきた言葉で完全に白けた。国際的に見ても大きなミス。恥ずかしい発言だ」と憤る。際立つ楊達い感もあることながら「自民党内の右派勢力の思いを代弁している発言は聞き捨てならぬ」と警告した。

## 戦局動かす情報戦 無批判に見ず冷静に判断を

とという映像が流れたが、実際にはほとんど撃ち落とせなかった。だが、それでイラク軍の士気は低下した。国家や軍が流すものはすべて情報戦の一環だ。自分たちに有利にするために流す戦争手段の一つ。無批判に見てしまったら、気がめづらくなると警告されている。

判断の誤りは避けねばならない。戦時はなわさらない。山田教授は「かつての日中戦争は、英米仏といった大國が中国に武器や資金を支援し、日本は援助国もたかたかなければと戦線が拡大した」と言及し、こう警鐘を鳴らす。「日本はウクライナに防弾チョッキやヘルメットを送ったが、一歩進めれば防衛と攻撃の境目がなくなる。武器供与を通じて、ロシアやウクライナの戦争では済まなくなる。冷静さが求められる。」

家族や故郷のために命を賭す。でも、死んでしまったら人生は終わる。その人が大切にしている家族は、その人に会えなくなる。極限の選択に迫られた人びとを思うと胸が苦しくなる。簡単に話しかけられ「感動した」と思っている日本人ばかりではないと分かっている。(編)